

## 実践報告書

- 記入日：2024年3月29日
- タイトル：VUEVOを活用して、深まる対話を目指す
- ご所属：京都市立藤城小学校
- お氏名：大松有香（おおまつゆか）
- 略歴：2004年京都教育大学卒業、(株)サイゼリヤで総合職として店舗運営に従事  
2007年京都市の小学校教員として勤務（本校で4校目）  
3年生学年主任、研究主任、GIGAスクール推進主任、情報教育マイスター  
2018年NPO法人まなあそびを設立し、代表理事として、  
週末には地域教育に取り組む

### 1. 実践の背景:

現在、私は、対話の指導が難しいと感じている。話し言葉が目に見えないため、児童が発している「いい貢献」を見つけることが非常に難しいからである。その結果、私は、多くの貢献を見逃し、クラス全体に「いい貢献」を広めることができていない。

そこで、私に見えないものが見えるようにすることから分析を始めようと考えた。しかし、全グループにレコーダーを置いて子どもたちの会話を記録し、文字化し、分析することはあまりにも骨が折れる作業である。

企業が持つテクノロジーの力を教室に入れることで、効率的に分析をできるようになるだろうと考えた。継続的に分析できる体制を整えれば、子どもたちとの対話に関する探究ができると期待した。

また、本校では、校内研修で「対話の時間」を確保している。「深い対話」とは何か、どのような要素が含まれると「深い対話」になるのか、多くの教職員がこの問いに答えられない。

### 2. 実践の目的:

本研究は、対話内容の見える化を通じて、児童がより良い対話を行う力を育成することを目的とする。

テクノロジーを活用することで、「いい貢献」が可視化され、児童の行動変容を促進できる可能性に期待した。具体的には、対話内容を視覚化するツール

(VUEVO)を導入し、児童が自分の発言や他者の発言を振り返り、より良い対話を目指す動機付けを図る。児童が主体的に対話に参加し、互いに学び合う環境を構築することを目指した。

この授業研究により、児童が対話を通じて成長し、クラス全体のコミュニケーション能力が向上することを期待した。

児童向けと同様に、教職員の対話の可視化も行い、教職員の対話スキル向上、行動変容も目指した。

### 3. 実践の内容:

具体的にどのような活動やプログラムを行ったのか、「未来に触れる段階」「未来を考える段階」「未来のために行動する段階」ごとの詳細な記述してください。

<未来に触れる段階> 見えなかったものが見えるようになる

言葉を可視化する: VUEVO を使用し、消えてなくなるはずの言葉が目に見える形で残る体験をする。

共通体験を作る: 見えるようになった言葉たちを分析し、自分が「何ができていて、何ができていないのか」を理解する。価値や貢献度の高い発言はどのようなものであるかを理解する。

<未来を考える段階> 対話の実践

意見交換: 自分の意見を述べたり、他の意見を聞いたりする機会を複数回設ける。これにより、異なる視点を学び、考えを深める。

試行錯誤: 対話の実践と振り返りを重ねることで、試行錯誤のプロセスを通じて改善点を見つける。

疑問解決の練習: 疑問を疑問としてちゃんと掴めるようになること、疑問を放置せずに問いを投げっていくことなど、より良い対話をするために大切なことを考える。

<未来のために行動する段階> 表現する（アウトプット）

学習で活かす: 人に伝えたり、人がまとめたことを聞いたり、質問したりしながら、より良い納得解を導く学びを実現していく。

このようにして、子どもたちが表現の過程で人と共に対話を重ね、試行錯誤を繰り返し、自ら考え、行動する力を養う。これにより、未来の社会で活躍できる力を育てることを目指した。

### 4. 実践の方法:

まず、VUEVO を子どもたちに紹介した。中央に一つだけ置き、会話の様子が可視化されることを大型テレビに写して紹介した。

次に、5 台の VUEVO をグループごとに配置した。子どもたちは、自分の声が文字化される様子、発話される方角によって話者を認識していることを知った。

そして、全グループが VUEVO を真ん中に置き、対話を行った。その後、同様に対話を重ねていった。

#### 5. 実践の結果:

計画では、文字化された会話のデータを子どもたちが閲覧し、自分たちの対話を振り返れるようにと考えていた。しかし、校内 LAN への接続ができずモバイルルーターでネット接続を行っていたため、即時共有が難しく、それは叶わなかった。

よって、担任である私が会話のデータを分析し、次の時間の冒頭にそのフィードバックを行うことにした。

計画とは違う取り組みにはなったが、子どもたちの対話の力はぐんぐん成長した。お互いで問いを投げ合う大切さや、一つの話題について 10 分以上話し続け、自分たちで話題を深めていけるようになった。

#### 6. 実践の課題:

取り組みを通じて育成した対話の力は、全教科で生かされた。子どもたちは、算数で説明をするだけでなく、「なぜ〇〇なの？」と、問えるようになったり、国語で言葉にこだわって議論したりする様子が見られるようになった。

特に道徳で、子どもたちはこの力を大きく発揮した。自分で考えたり、友達と対話したりしながら、道徳的価値に迫れるように成長した。この姿は校内の先生たちに公開授業として共有した。「対話とは何か?」「対話を深めるとはどのようなことか?」「学習者主体で学ぶとは?」について、先生たちと対話する機会になった。

京都市は、VUEVO の使用を認めてはくれたが、公認として LAN に繋がせてもらえなかった。セキュリティーが最も大きな理由として伝えられてはいる。一方、担当の方が先進的な事例を許認可する仕組みがないことに課題を感じておられた。これからの発展に期待している。

また、京都市の予算的に、VUEVO を継続的に活用できないことも課題である。しかし、VUEVO を使ってわかったことがあるので、VUEVO がなくてもその視点を持って指導にあたっていこうと考えている。

#### 7. 今後の展望:

- 今後、協働的な学びの実践をどのように進めていくのか、課題や可能性などの展望を記述してください。

協働的な学びを実現するには、対話の力は欠かせない。主体性を持って、人と共に学び、できることとわかることを増やせる子どもたちが育成できるよう取り組みを重ねていく。

また、校内研究での「対話」取り組みの発展に学びを活かす。